

日本比較文化学会

北林 利治

日本比較文化学会は、文化の比較研究及び比較研究の方法論に基づく諸学問分野の研究を促進し、多文化間の理解と学際的な学術の発展を図ることを目的としている。日本比較文化学会のこれまでの歩みは、異文化の諸相の解明にあたった時期(第1期)から、比較文化論から比較文化学への移行の時期(第2期)、そして比較文化学の構築をめざしている現在(第3期)に分けることができる。学会誌『比較文化研究』は年5回発行され、平成22年には、第90号(9論文収録)、第91号(20論文収録)、第92号(14論文収録)、第93号(19論文収録)、第94号(35論文収録)が発行された。

表現という観点から、『比較文化研究』における研究動向を見てみると、2つの点からそれを特徴づけることができる。1つ目は、日本比較文化学会が目指している比較文化学の構築にあたっては、文化に対して多様な捉え方があるということをも前提として、複眼的な視座をもつことが重要であるという点である。比較文化学は、さまざまな分野を「文化の比較」という視点から、いわば統合し、横断させる視点を重視している。このことから、とくに言語表現を分析の対象として限っても、言語学、文学からのアプローチのみならず、歴史学、芸術学、心理学などの視点から広く言語表現を分析した論考が見られるのは、比較文化研究が学際的研究を基盤にしていることを示しているといえる。

もう1つの観点は、比較文化研究は個々の事実の記述と検討に基礎を置くという点である。日本比較文化学会の第3代会長であった芳賀馨は、「比較文化学序説」(『比較文化学論纂』1998)の中で、「比較文化学は、…個々の特殊の事実の検討から始まって、総合的共通点を求め、帰納的に一般的法則性に迫る研究分野であるべきものと思う」と述べている。比較文化学の理論的枠組構築をめざするのが究極の目標であるとしても、そのための基礎的研究として、それぞれの文化の個々の事実の検討がじゅうぶんになさなくてはならない。その意味において、さまざまな言語や文化の分析が『比較文化研究』で扱われていることは、比較文化学の構築にあたってあるべきふさわしい姿であるといえる。

平成22年度に発行された『比較文化研究』だけを見ても、分析の対象となっている言語は、日本語、英語のほか、中国語、シンハラ語、フランス語、モンゴル語、タイヤル語などであり、比較文化研究の名にふさわしいものになっている。

なお、『比較文化研究』の掲載論文のタイトル一覧は、日本比較文化学会のウェブサイト(<http://hikakubunka.jp/>)で見ることができる。

(京都橘大学)